

2019年4月24日

特定非営利活動法人 空援隊事務局御中

株式会社朝日新聞出版 AERA 編集部  
大平 誠（おおひら・まこと）

<<ご質問に対する回答です。以下、ご確認ください。>>

## 【遺骨収集問題についての質問】

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。また、平素より朝日新聞出版の取材活動などにご協力を賜り、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。小誌の「時代を読む」というコーナーで、5月13日発売号で遺骨収集問題、とりわけ第二次世界大戦で最も多くの戦死者を出したフィリピンでの遺骨収集について取り上げたいと取材を続けております。中でも厚生労働省の委託を受けた貴法人が、飛躍的に遺骨収集の数を伸ばしながら、フィリピン人の骨が多数混入しているとの疑惑から収集事業が中断してしまったことについて検証したいと考えています。昭和での戦争から貴法人がフィリピンでの収集に取り組んだ平成時代を経て、新たに令和と元号も変わるこの時期に、きちんと総括しておくべき問題と存じます。ご多忙中恐縮ですが、下記の質問に文書でご回答賜れば幸いです。誠に勝手ながら、締め切りの都合上、5月3日（金）までにご回答いただきたく存じます。何卒よろしくお願いいたします。

- ① 貴法人が集められて鑑定可能だった遺骨311検体のうち、国立遺伝学研究所で調べた130検体中、日本人のものとみられる検体は5、さらに精度の高い核DNAを用いた2大学の鑑定では181検体中、日本人のものとみられる遺骨はゼロでした。この結果を招いた原因をどうお考えですか。

### （空援隊回答）

厚労省が独自の判断で持ち帰って、鑑定されたことに関する意見はありません。

但し、厚労省は、「フィリピンでの遺骨帰還事業に関する検証報告書」によれば、二か所以上からの集積されたご遺骨と、マニラ警察に没収保管された後、行方不明になっていたご遺骨（厚労政務官が訪比の際に都合よく、突然、行方不明から発見されたとされているモノ）から検体を持ち帰っています。その検体の特にマニラ警察が保管していたとしているモノがどのくらい混入していたのか、そしてそれらのご遺骨は誰が鑑定されたものかは聞いてみたいものです。別途、年代測定もしてもらいたいですね。

- ② 貴法人が収集し、既に戦没者として埋葬されている遺骨も①と同様に大多数がフィリピン人の骨であると思料されますが、いかがですか。そうでない（大多数が日本軍将兵の遺骨である）とすれば、根拠は何ですか。①のものと収集方法が異なるのですか。

**（空援隊回答）**

混入していたと言われていますが、事実誤認にもほどがあると思います。我々が独自に遺骨を持ち帰ったことはただの一度もなく、全て、現地で、厚労省職員に引き渡し、厚労省とフィリピン政府との間の了解や鑑定により、厚労省職員が持ち帰ったものです。我々はそのサポートをしていたにしか過ぎません。従って、我々は元々遺骨の鑑定人でもなく専門家でもありませんので、コメントする立場にもありません。

- ③ 貴法人創設者の倉田宇山事務局長は2010年当時、ある程度フィリピン人の骨が混入するのは致し方ないという趣旨のご発言をされていましたが、その許される「程度」は何%ぐらいですか。

**（空援隊回答）**

上記と同様です。人間がすることですから、厚労省が、フィリピンだけでなく全世界でしてきたような方法論が鑑定というのであれば、混入することもあり得ると思います。

- ④ 当時の収集方法について、反省点があれば具体的にお知らせください。

**（空援隊回答）**

自分たちで鑑定して持ち帰るまでをすべて管理するべきだったという事だけです。

- ⑤ 倉田宇山氏は2010年当時、フィリピンの遺骨問題に興味を持ったのは、現地で活動している浅野某氏（2005年、ミンダナオ島で帰国したがっている旧日本兵がいるとして、ゲリラとの仲介役をしているとして報道陣などに接触していた人物）からの情報がきっかけだったと発言されていましたが、相違ありませんか。また、厚労省の委託を受けて空援隊として収集した骨は、やはり浅野某氏からの情報を活用して収集したのですか。

**（空援隊回答）**

当初の案内をしていただいたことは確かです。しかし、その後はそのような情報をいただいたことは一切ありません。後に彼が、フィリピンの現場まで出向かれて、空援隊のスタッフから、遺骨収集の為の当時我々がスタッフに持たせていたフィリピン国立博物館発行の許可証の写しや遺骨そのものを買いに来られたことくらいしか知りません。

- ⑥ 貴法人はいまもサイパンなどで遺骨収集活動を行っているようですが、収集方法はフィリピンでのものを踏襲しているのでしょうか。改善点などがあれば教えてください。

**(空援隊回答)**

基本的に、情報収集以外はしておりません。また、改善点などがあるとすれば、独自で持ち帰れるような法整備をしていただくことくらいでしょう。

サイパンでもフィリピン同様、遺骨情報を確認し、厚労省に報告しておりましたが、当初は我々の情報を元に収容に来ていた厚労省が、予算の都合などの理由で来なくなった上、最近では収容に来る気配もありませんし、裁判和解後は、「話をすることはない」と明言されておりますので、情報を提供することも止めました。現在は全て、現地政府と話をし、合法であることを確認して、情報収集を進めております。

- ⑦ 貴法人が関わったフィリピンでの収集活動において、現地の人たちが持ち寄った骨を金銭で買い取っていたという証言や報道がありました。これらについて現地を含めた空援隊スタッフにこうした事実の有無は確認されていますか。

**(空援隊回答)**

NHK との裁判記録は公開しておりますので、当然、既にご覧いただいていることと存じますので、それ以上必要ないでしょう。全て、法廷で明らかになっております。

そのような事実は、全くありません。

- ⑧ 遺骨収集活動を他団体と共同で行うオールジャパン構想を掲げていた野口健氏が理事を辞する際にこうブログに書いています。

<空援隊の公式見解では「(他団体) との摩擦は避けられないし、その摩擦を雑音として、結果だけを追い求める以外に正攻法はない」と明記され、空援隊に再度確認したら「オールジャパンはあり得ない」との返答でした>

この考え方は、今でもお変わりありませんか。

**(空援隊回答)**

海外に残った遺骨を「一刻も早く、一体でも多く」帰国してもらうための方法論が違う人たちが一緒に活動が出来るのかという否定せざるを得ないという事です。

勿論、オールジャパンでその体制が作れるのなら、大賛成です。

空援隊は、フィリピン時代の初期からは現地活動参加条件として「禁酒」と「食事を食べ残さないこと」を厳守しています。飢えて亡くなった兵士も多数いたと思われる現地でする事ではないと考え、我々は現地で飲酒をしませんし、食事を食べ残すようなことも宴席を設けるようなことも一切しません。かつて現地調査活動中に、空援隊ではありませんでしたが、飲酒によって、体調を崩す人間が出て、現地での活動に支障をきたした事例も複数ありました。我々はその可能性が直接危険性に繋がる事と理解している以上、その指針を変えるつも

りはありません。それが我々の英霊となった人たちへの敬意のはらい方ですし、体調管理という意味でもギリギリの活動内容には不適切だと判断しているからです。他団体の参加者からは、現地で飲酒がなければ参加しないとと言われても来ましたし、厚労省の職員などに理解を求めましたが、ごく一部の職員以外無駄でした。酒を飲んでる暇があるのなら、その分の時間を現地に於いては出来る限り調査に振り向けるといふ集中力が我々民間の寄付によって成り立っている団体には求められると考えております。

従って、調査能力を極限にまで追求する我々の姿勢が相容れないのだろうと理解しております。

また、現在のような情報収集をして、遺骨を発見しても、厚労省職員が一緒でないと再度出直してこなければならぬという非効率な方法論を変える気がない厚労省とも一緒に活動は出来ないのだろうと理解しております。

当初より、我々は情報収集しかしてきておりません。厚労省に依頼されて、遠隔地とか危険性の高い所、更には、頻繁に現地に来られない厚労省の為に、代理で集積所に集めていたにすぎません。全て空援隊が悪いように言われていることは良く知っておりますが、事実として、フィリピンで万一、我々が不正を働いていたのだとしたら、どうして、その後のサイパンでも、また、活動を停止したフィリピンにおいても、厚労省は空援隊に協力を依頼し、空援隊の情報を元にして、遺骨収容を行ってきたのでしょうか？

ご一考いただければ幸いです。

以上、ご回答申し上げます。

尚、この質問及び回答は掲載された記事と共に、全て、空援隊 HP 等に公開させていただきます。悪しからず、ご了承ください。

令和元年 5 月 3 日

空援隊 専務理事  
事務局長 倉田宇山